



イペアンロー! (いただきます)

今回は、アエスケプ（私たちがそれで料理するもの）、台所道具をしょうかいします。

まずは刃物。昔のアイヌ民族は、男性も女性も、出かける時にはいつもマキリ（小

ス(なべ)/カスッ(しゃくし)



イタタニ(調理台)

メノコイタ(まな板)

「アエスケプ」

台所道具 使いやすく工夫

刀)を身につけました。山へ入るにも、マキリとタシロ（マキリより大きい刀）さえあれば、何でもできたといひます。山菜や果物をとったり、魚をさばいたり、木の枝や葉やつるを加工したり。時にはクマなどから身を守る武器にもなりました。料理用の刃物は、スケマキリ（料理小刀）と呼ばれました。

ス（なべ）は、なべづるの付いた、火の上につるす形の鉄なべです。大きさのちがうものをいくつそろえ、オハウ（スープ）やサヨ（おかゆ）をつくります。調理台はイタタニといって、直径20センチ、長さ20センチほどの丸太を立てて使ひます。チタタ（肉や魚をこまかく刻んでつくる、たたき）づくりや、骨付きの食べ物を切るのに便利。メノコイタという、まな板とボウルがくっついた形の道具もあります。まな板の部分で山菜などを刻んだら、横のボウルにそのまま移すことができます。汁物をよそうカスプは、木をくりぬいて大きなスプーンのような形につくります。メノコイタやカスプには美しい彫刻をほどこし、大切に使ひました。

いまま せんきょせい ど 今の選挙制度になるまで



78年前

女性もOK、20歳から50K
赤ちゃん連れはいいけど
子ども連れはだめ

98年前

男性であればお金持ち
でなくてもOK



134年前 選挙制度ができた

投票は25歳以上のお金持ち男性だけ



「フムフム」はアイヌ語でのあいづち

今年は4月に、多くのまちで、まちのトップや議会の議員を選ぶ選挙がおこなわれます。私たちの国やまちは、住民からお金（税金）を集めて人々のために使ったり、人々がくらしやすいルールを作ったりします。何かを決めるには、代表が議会で話し合ひます。その代表=議員を選ぶのが選挙です。日本国憲なら、18歳になるとだれでも選挙で投票できます。

明治時代に議院ができたとき、選挙に参加できるのはお金持ちの男性だけでした。アイヌ民族の中には、必要な登録がされず、選挙に参加できない人もいました。

国立アイヌ民族博物館（胆振管内白老町）の田村コップナラさんによると、北海道や樺太（サハリン）のまちの議会名簿には、昭和時代の初めごろまでに何人ものアイヌ男性が出てくるそうです。

いまでは、アイヌ民族で国会議員になった人もいますし、民族衣装でまちの議会に立つ人もいます。長い時間をかけて、選挙は、女性や障がい者も当たり前に参加するように変わってきました。だれもが選挙に参加できれば、みんなの気持ちや願いが通じやすくなります。

さて、今年の選挙で注目されていることのひとつが「どうやって差別をなくすか」です。ニュースを見ていると、同じ性の人を好きになる同性愛者などの性的少数者に対する差別に、障がいのある議員が抗議していることがあります。アイヌ民族への差別をなくすことに、性



7年前

子ども連れでもOK、18歳から50K

少しずつ『みんな』の
選挙になってきた



民族衣装で町議会に立つ議員

みんなの選挙 差別させない世の中へ

みんな同じだけど…



みんなが食べられる♪



きょうの目とば

●マイノリティー

アイヌ民族や性的少数者、障がい者を、マイノリティー（少数派）と呼ぶことがあります。その反対はマジョリティー（多数派）です。

数が多い・少ないというだけではありません。マジョリティーは社会の進む方向やルールを決める力を持っています。

日本では、女性と男性の力のバランスが悪く、男性の方が世の中のことを決める力が強いと言われます（世界の146カ国・地域で男女のバランスの良さを比べると日本は116位）。女性は男性に比べて数が少ないわけではありませんが、日本では男性がマジョリティー、女性がマイノリティーになっています。

社会のバランスが悪いと、一部の人がばかりが我慢することになる可能性もあります。選挙は、だれも我慢しなくてよい国にするための第一歩なのです。

●平等と公平

「平等にしよう」「公平にしよう」。よく似ているけれど、実はまったくちがいます。平等は、だれでも同じようにあつかうこと。一方、公平は、だれもが同じくらい幸せになるように、必要な配慮をすることです。

異性と結婚したい人と同じように、同性と結婚したい人のことも社会が受け入れる。日本語でくらしたい人と同じように、アイヌ語でくらしたい人のことを社会が受け入れる。これが公平な社会です。

れたりと、よく似た経験をしているからです。だれかへの差別に反対することは、自分や友達に差別されない世の中をつくることなのです。

みなさんの学級会や児童会はどうですか。



ダーヒンニエニ・ゲンダーヌ

主人公のダーヒンニエニ・ゲンダーヌ（日本名・北川源太郎）は、1926年（大正15年／昭和元年）ごろ樺太（サハリン）に生まれた、ウイльта民族の男性です。

樺太にはアイヌのほか、ウイльтаやニブフなどの少数民族がくらししてきました。日露戦争後、樺太の南半分が日本のものになると、日本の役人は人々をオタスという村に集め、そこで日本語を使わせることにしてしまひます。

やがてアジア・太平洋戦争が始まり、もともと国境に隣接なく、自由に移動していた少数民族は、国境近くの警備にかりだされました。戦争が終わり、樺太がソ連のものになると、今度はソ連の情報を日本に流したスパイとして、ゲンダーヌたちはシベリアで働かされます。

厳しい寒さの中、重労働と栄養不足により、たくさんの仲間が命を落としました。日本人として8年間の刑を終えたゲンダーヌは、とま

せんそう ほんぽうしやうすうみんぞく
戦争と北方少数民族
あるウィльтаの生涯

田中 了編

どいながら日本に行きました。京都の舞鶴港で船をおりたとき、日本を自分の国とは思えず、自分はウイльтаなのだと強く感じました。

ゲンダーヌは網走に住み、戦争中に日本兵として働いたことを政府にうったえました。しかし政府は、少数民族に戸籍がなかったことを理由に正式の軍人とは認めず、軍人にはらうはずのお金をはらひませんでした。

ゲンダーヌは「ジャッカ・ドフニ」（ウイльта語で「大切な物を納める家」）という小さな博物館をたて、84年に亡くなるまで館長をつとめました。今は、北方民族博物館（網走市）などでウイльтаのことを知ることができます。

（1994年 草の根出版会＝絶版）

